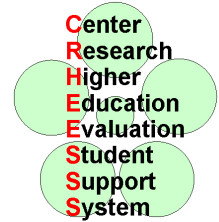


週刊センターニュース No.332



第332号(2010年11月8日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daiyou_rche/index.htm

〇●〇 自己管理学習と自己調整学習 〇●〇

2010年10月18日から22日まで開催された教育工学研究領域の国際会議 e-Learn 2010 に参加してきた。その中で大変興味を持った研究を紹介する。University of North Texas の Pamela Bracey 氏の研究発表”Self-directed learning vs. Self-regulated learning: Twins or Just Friends? A Comparative Review of Literature”である。自己管理学習 (Self-directed Learning) と自己調整学習 (Self-regulated Learning) を対比させながらレビューを行っているものである。

同氏は1956年から2008年までの自己管理学習と自己調整学習に関する論文レビューを行い、定義と学習者の特徴について整理している。定義としては、自己管理学習の場合、「学習目標、それに関する教科書などのリソース、評価法、学習方略、さらにはその学習する必要性の検討まで学習者自身が主導権を取っていくプロセス」としている。それは他者の力を借りようが借りまいが、自分で主導的に決定していくことになる。この概念には数々の要因が関係し、コンセプトも曖昧であるとしている。一方、自己調整学習は「いつ、どこで、どのように学習するかを調整する」としている。つまり、学習目標でも大枠は決まっている中で、メタ認知を活性化させ、学習者個人の学習目標 (サブゴール) を立て、認知的、社会的側面から学習方略を駆使する学習プロセスであるとしている。

学習者の特徴としては、自己管理学習ができる学習者は論理的、創造性が高い、自分で決めて行動することを好む、感情的に安定しており、根気があり、独立性が高いとしている。また Bruin (2007) を引用し、内的動機付けで行動し、学習すること自体に興味があるが、自尊心が高いと報告している。自己管理学習は生涯学習においてその能力を発揮し、大学だけではなく、企業等でも注目されている概念である。

自己調整学習ができる学習者の特徴は効率的な目標設定を行い、その目標を設定するために計画と方略の選択を行う。また使用する情報整理を行い、学習進捗をモニターするというメタ認知が非常に高い学習者である。どんどん難しい課題を見つけ、チャレンジしようとするが、自分の強さと限界も把握している。自己調整学習者は個人だけに閉じず、他者との関係性において学習を進めていくタイプでもある。例えば教員が信頼している学習者をライバルとして、それを乗り越えようとするといった社会的な学習方略も選択しうるタイプである。

それぞれの育成方法として、同氏が整理しているには、自己管理学習については問題解決学習を実施することが有効な方法の1つとしている。しかし、課題レベルの設定としては現在の学習者のレベルよりも越えているものが良いとしている。しかし必要な要素として、事前準備をさせること、学習支援者・相談者を配置すること、最後に初めての問題解決学習は成功体験とすることとしている。

自己調整学習については、学習者が自分で立てたサブゴールに焦点化した活動を行わせ、自己評価を行うように奨励することとしている。また自己管理学習と同様に問題解決学習を実施するのも推奨しているが、習得すべき知識と現在の知識のギャップや自分の強みと弱みを認識させるといった意識をさせることが有効としている。

現在、我が国では就業力育成ということが大きな課題となっているが、自己管理学習、自己調整学習いずれにしても卒業後、学生が自主的に成長していくための必要要素が整理されていると考える。大学の授業において、知識の習得過程として、自分の成長を自分で考え、実感していくことができるための工夫を導入することは可能であろう。今後、自己管理学習、自己調整学習に関する研究がより

発展し、現場に展開されていくことが期待される。

引用文献

Bracey, P. (2010) Self-directed Learning vs. Self-regulated Learning: Twins or Just Friends? A Comparative Review of Literature, Proceedings of eLearn 2010, pp.1600-1607

Bruin, K (2007) The Relationship between personality traits and self-directed learning readiness in higher education students, South African Journal of Higher Education, 21, pp.228-240

(文責：教育支援システム研究部門 山田政寛)

○●○ 産業・組織心理学会第28回大会、日本社会心理学会第51回大会

参加報告(2) ○●○

2000年以降は、バブルの崩壊に伴い、雇用情勢が悪化していった時期に重なる。この時期から、一時期のITバブル期、小泉政権下の景気回復期を除いて、大学生の就職が困難な時代に入ったことは、周知の事実であろう。この時期、新卒で正社員にならずに、あえて派遣社員や契約社員を選ぶという進路決定や、大学院進学者数の増加といったように、進路が多様化した時代でもある。

こうした時代背景の中で、心理学者にとっても、自分の指導生の進路という問題が差し迫ったものとなり、大学生の進路探索や就職、キャリア構築に関する研究が増えたのであろう。ただ、社会心理学者と産業・組織心理学者は、「学生指導」のために研究するというよりも、社会心理学者は、大学生の進路探索行動を社会問題の一部ととらえたうえで、「学生が何を考え、どのような行動をとり、その結果、何が起きるのか」ということに対して興味の比重が大きく、産業・組織心理学者は、「新入社員を採用する現場にとって役に立つ知見かどうか」ということに関心が向いているようである。これは、心理学というものが、個人差を説明しようとする性格を持った学問であり、「指導」のために研究するというよりも、「個々人がそれぞれの未来を自己決定する」ことの方が主な関心事になりやすいためのかもしれない。

ここまでの研究を概観すると、「大学生は、進路を決めるその過程で、心理的な成長を遂げたと感じられる」という結論になりそうである。その中でも、大学の授業などが影響をほとんど与えないのも興味深い。つまり、大学が先回りした授業をしても、結局は本人が主体的に考え、行動することの方がはるかに重要であり、主体的に考え、行動することが個人の成長を促進する。そのきっかけを与えるのは、少なくとも授業ではないようである。そして、学生にとっての進路探索は個別性が非常に強いいため、教員が授業をするよりは就職支援室等による一人ひとりに対するサポートの方が重要性は高いと考えられる。

さて、2010年代に突入した本年の両学会に参加すると、大学生の進路に関する研究はほとんどなくなっていた。これは、2000年代に大体の結果をみて、研究対象としての就職活動のブームは終息に向かいつつあり、あとは就職支援室などをはじめとする、現場での個別具体的なサポートの問題となりつつあるのかもしれない。(文責：大学教育開発・支援センター博士研究員(IR担当) 尾関美喜)

○●○ 学生支援GPシンポジウム開催のご案内 ○●○

日 程：平成22年11月11日(木) 13時～17時

場 所：角間キャンパス 自然科学大講義棟レクチャーホール

スケジュール：開会の挨拶 金沢大学学長 中村信一

招待講演 「グローバル化と日本の大学」中嶋嶺雄氏(公立大学法人国際教養大学理事長・学長)

活動報告 吉川弘明(保健管理センター教授・学生支援GPプログラム責任者)及び学生支援GPクルー(学生)

外部評価委員講評 山本嘉一郎氏(京都光華女子大学副学長)、引地聰氏(花王株式会社香料開発研究所所長)、高石恭子氏(甲南大学文学部教授)

閉会の挨拶 金沢大学副学長(教育担当理事) 樫見 由美子